

# 継承・救済・当事者性

違和感、怒り、疑問、痛み……私たちの直面する負の出来事や経験は、個人的なものであると同時に、いまだ存在する社会構造上の不均衡や格差、偏見など、共同体における歪みによってたらされるものでもある。それはときに忘れ難い、修復困難な傷として、それぞれの「私」を苦しめ続けるが、一方で痛みを受けた主体に隣り合う、あるいは遠く離れた時と場所にいる別の「私」は、痛みの主体から発せられる声を、どのように聴くことができ、傷を癒やすことができるのだろうか。そしてその行為は、個人に、社会に、はたして何をもたらすのだろうか。

聴き取れない声を聴くこと。体験を次の世代に伝えていくこと。共同体の姿をとらえ直すこと。奥野佐矢子、虎岩朋加、小松原織香各氏の論考は、語る者、聴く者の関係性の認識を更新し、新しい救済のあり方を浮かび上がらせる。

前号、前々号に続くポストフェミニズム関連論考の邦訳も、これらの問題に呼応する。二〇〇七年に刊行されたアナタ・ハリス氏の著作は、高度情報化社会における「女の子たち」の、主体性や発信の姿を可視化する。それまで疎外されてきた者たちは、ネットワークのなかで語り、場を持ち、行動する。二〇一八年に刊行されたサラ・バネット・ワイザー氏による著作は、ポストフェミニズムの先にあるものとして「ポピュラー・フェミニズム」と「ポピュラー・ミソジニー」を定義する。メディアにおける「物語る私」がもたらす新しいフェミニズムの両義性が、新たな反発の姿とともに描き出される。めまぐるしく変わりゆく社会のなかで、私たちは誰の声を聴き、何を受け取り、語り継いでいくのだろうか。個人の語りがあふれる今だからこそ、フェミニズムの角度から考えてみたい。